万国の労働者団結せよ！万国の労働者と被抑圧民族団結せよ！

（毎月１回１日発行）1969年12月20日第３種郵便物認可

2019-10-1
No.1045
500円

思想運動

8・27最高裁判決糾弾 2面
日朝友好女性訪朝団に参加して 3面
裕仁の「反省」ってナンダ!?（中嶋啓明） 4面
辺野古基地問題の経緯と闘い（金治明） 6面
おおさか維新はなぜ強い？（木村真） 8面
書評特集 10～11面

朝鮮高校「無償化」裁判で最高裁が下した原告敗訴の不当決定に対する緊急記者会見と抗議集会が、八月三十日文部科学省前で開かれ、約六〇〇名が参加した（写真撮影＝田沼久男）

安倍改造内閣
最悪かつ最強硬な改憲シフト
現場を基礎に秋以降の闘いへ

九月十一日、第四次安倍再改造内閣と自民党の新執行部が発足した。その顔ぶれを見ると、新しい体制が改憲と軍拡、民族排外主義路線を強硬におし進めるきわめて危険な布陣であることは一目瞭然だ。二〇名の新閣僚の内、日本会議議連（日本会議の国会議員組織）の幹部が実に二二名を占める。首相の安倍晋三と麻生太郎財務相は同議連特別顧問、菅義偉官房長官、高市早苗総務相、橋本聖子五輪相が副会長、衛藤晟一沖縄北方相が幹事長、加藤勝信厚労相が副幹事長、萩生田光一文科相が政策審議副会長……といった具合だ。党役員では、二〇下村博文選対委員長、稲田朋美幹事長代行も日本会議の中心メンバーで改憲派の急先鋒である。

安倍側近の世耕弘成が参院幹事長に就いた。世耕の任務は、山東昭子参議院議長とタッグを組み参院で改憲論議を何としても巻き返しをはかり、安倍の総裁任期が切れる二〇二一年九月までに憲法改悪を実現する、これが改憲派の描く新たなシナリオだ。

米軍との一体化を伴う大軍拡路線も進むだろう。八月末に来年度の概算要求が出揃った。軍事費は五兆三三三億円、八年連続の増加で過去最大となった。最新鋭ステルス戦闘機Ｆ35Ｂの購入費など米国製武器「爆買い」の費用は五〇一三億円にのぼる。イージス・アショア関連費一二一億円、護衛艦「いずも」の空母への改修費用三一億円なども盛り込まれている。

辺野古新基地建設の問題はどうか。『琉球新報』九月十三日付社説は、安倍再改造内閣を「辺野古移設強行の布陣だ」（大見出し）とし、「強硬姿勢が顕著な河野氏を防衛相に据えたことは、何が何でも辺野古新基地建設を強行するという安倍政権の強い意志の表れと見ていい。離島住民の反対が強い南西諸島への自衛隊配備を巡っても、周辺地域との緊張を高めることもいとわず突き進むようでは危険だ」と強い警戒感を表明した。

改造内閣発足の日の記者会見で日韓関係について問われた安倍は、「政府は国際法に基づいて韓国側に適切な対応を求めている。その方針は新しい体制のもとでもみじんも変わらない」と強弁した。歴史修正主義者のオンパレードといってよい改造内閣によって、関係改善どころかより強硬な民族排外主義の外交路線が打ち出されることは想像に難くない。朝鮮や中国への対応についても同じである。

朝鮮高校無償化裁判における相次ぐ不当決定やあいちトリエンナーレの「表現の不自由展・その後」の中止問題に見られるごとく、国内においても歴史修正主義・民族排外主義の流れが強まっている。政府・マスコミがこの傾向を一段と加速させる危険性が出てきた。

消費税が一〇％に増税される一方で、社会保障政策では、あらゆる分野でいっそうの給付の削減と人民の負担増が強いられようとしている。政府は全世代型社会保障検討会議を発足させたが（九月二十日に初会合）、ここには経団連、経済同友会のトップ二人が加わる一方で労働組合や福祉現場の代表は一人も参加していない。労働政策についても、資本家の利益にかなった「規制緩和」が着々と進められるなか、関西生コン支部への不当弾圧に見られるように、抵抗する労働組合に対しては徹底的な破壊攻撃が仕掛けられている。

以上縷々述べたような反動政策をより強力に遂行することが改造内閣の使命なのだが、小泉進次郎入閣の政治的演出なども功を奏し、その本質はぼやかされ、各種世論調査における内閣支持率は軒並み五〇％を超えた。森友疑惑の中心的政治家である萩生田の入閣、電波停止発言の高市が再び総務相に就いたことなどはもはや問題視されない。

敵の攻撃の要（かなめ）は、体制が抱える矛盾、人民の不満を外部に向けさせる民族排外主義のイデオロギー政策だ。十月～十一月の新天皇即位関連儀式や東京五輪に向けたムード作りもナショナリズムへの世論誘導に最大限利用される。これに打ち勝つ階級的・歴史的観点に立った思想闘争の強化が求められる。

そして何よりもそれぞれの持ち場で頑強に闘い抜くことだ。本紙今号には、朝鮮高校「無償化」裁判を闘う金斗植（キムドゥシク）さんの文章が載る。その結びはこうだ。「俺たちは負けない」「いくらでも倒してみろ」、「必ず勝つ！」 【大山 歩】

朝鮮高校「無償化」裁判
俺たちは負けない、必ず勝つ！
最高裁8・27不当決定に抗議する！

金斗植（キムドゥシク）（東京朝鮮中高級学校高級部三学年学年主任）

八月二十七日、最高裁は、六二人の東京朝鮮中高級学校学生が原告となった「無償化」裁判で、原告敗訴の決定を下した。同じ日、最高裁は大阪朝鮮学園の上告を棄却する決定も行なった。この不当決定は、他の高校生と平等に扱ってほしいという朝鮮高校生たちの思いを踏みにじり、またすべての高校生に学ぶ機会を保障しようという「高校無償化」法の趣旨を否定するものであり、断じて許すことはできない。以下の文章は、東京朝鮮中高級学校高級部三学年の学生主任で原告の学生の担当でもあった金斗植さんの抗議のメッセージである。関連記事二面。

【編集部】

八月三十日、最高裁の8・27不当決定に対する抗議の「金曜行動」、路上記者会見の場で、ある新聞記者の、そこまでして守ろうとする「民族教育の意義」は何かという、他愛もない質問に対してわたしが放った「第一声」である。わたしはこの裁判における原告担当教員の一人として、この上ない憤りに震えが今も止まらない。

六年前、卒業と、進級を目の前に控えた三年、二年の学生たち六二人が勇気を振り絞り、自分たちの意思で、可愛い後輩たちのために、いつも苦労をかける親たちのために不当決定に対する抗議の「金曜行動」、路上記者会見の場で、ある新聞記者の、そこまでして守ろうとする「民族教育の意義」は何かという、他愛もない質問に対してわたしが放った「第一声」である。わたしはこの裁判における原告担当教員の一人として、この上ない憤りに震えが今も止まらない。

六年前、卒業と、進級を目の前に控えた三年、二年の学生たち六二人が勇気を振り絞り、自分たちの意思で、可愛い後輩たちのために、いつも苦労をかける親たちのために原告となり、裁判に挑んだ。わたしも父母たちと連絡を取り、説明会にのぞみ、また高校卒業後の連絡網を作り、裁判の戦いの中、熱い気持ちと勝利の信念を持ち、原告らと共にモチベーションを保ちながら、同じ気持ちで、裁判に携わってきた。

在校生たちも原告先輩たちの意思を継ぎ、「金曜行動」は勿論、練馬の「街宣」、さまざまな集会、署名、デモ、ありとあらゆる闘いの中で大事な学校生活を「高校無償化」闘争とともに送ってきた。

朝鮮学校の教師は日本の教師と同じく激務である。

ただ違うとすれば、想像を絶する低賃金でギリギリの生活を送りながら、それでも学生（生徒を朝鮮学校では「学生」と呼称する）の笑顔と明るい未来に対する信念を糧にして「民族教育」という大業をこなしている。

だがしかし、さすがのわたしも愛する生徒が目の前で涙を流し、首をたれ、裁判所を後にする姿を見る度に教員として、とても居た堪れない気持ちに襲われる。

この六年間、裁判で負けるたび、つぎこそは、こんどこそはと立ち上がってきた原告、そして現役朝高生たちの姿を見ながら、わたしは教員としての良心と、権力に対する無力さを憤りとともに感じ、かれらからまた力を貰い、闘い続けてきた。

「国と闘う学校」、「闘う学校生活」――朝高生は普通じゃないよ。

でもその中でわたしたちは悟り、目覚め、確信した。

「最後まで闘う」――これがわたしたちの信念であり、先代から受け継ぎ、子どもたちに引き継ぐ、鉄の掟であり、差別と抑圧の中で勝ち取った勝利の方程式だ。

「勝つまで闘う＝勝つまで負けない」――在日朝鮮人の魂と根性で何年、何十年、何世代でも正義と平等、真理のために闘うことをすべての同胞、卒業生、現役朝高生たちの熱い心で、東京朝鮮中高級学校の教員たちは皆に訴える。

「俺たちは負けない」、「いくらでも倒してみろ」、「必ず勝つ！」

「この国の正義は死んでいる。この裁判の始まりから一貫してわたしが信じて疑わない言葉であり、現実である。」

「この国の司法は腐っている。この裁判の終わりにあたって世の中のすべての良心が確信した言葉であり、現実である。」